

次世代に繋げるワカメの「わ」

～小学校の養殖体験学習で伝える気仙沼の自然と伝統～

宮城県漁業協同組合気仙沼地区支所青年部千尋会
青年漁業士 尾形 拓弥

1. 地域の概要

私たちの住む気仙沼市は、宮城県の最北端にあり（図1）、太平洋に面した沿岸部は三陸地方特有のリアス式海岸を形成し、静穏な天然の良港として沿岸・養殖漁業が盛んである。また前面には寒暖流が交錯する豊かな三陸漁場があり、遠洋・沖合漁業の基地としても発展してきた。



図1 階上地区の位置

2. 漁業の概要

私たち千尋会の所属する宮城県漁業協同組合気仙沼地区支所は階上（はしかみ）、松岩、鹿折（ししおり）、大島の4地区から構成されており、平成31年3月末現在で、正組合員373人、准組合員832人、合計1,205人が所属している。静穏な内湾の漁場ではワカメ、カキ、ホタテガイ等の養殖業、外海に面した岩礁漁場ではアワビやウニ等の採介藻のほか、内湾から外海にかけて広く、刺し網、籠漁などの漁船漁業も営まれている。平成30年度の漁協共販実績は、8億円余、品目別で養殖ワカメ5億7,000万円、養殖カキ1億6,000万円などとなっている。

3. 研究グループの組織と運営

私たち千尋会は、昭和27年に階上地区の漁家経営の発展・向上を目指し「階上千尋会」として発足した。現在は「気仙沼地区支所青年部千尋会」として、同地区を活動の拠点とし、15人の会員で、今回発表するワカメ養殖体験学習のほか、ワカメをはじめとした各種養殖試験、アワビ中間育成、磯根資源や幼稚仔の保護のための藻場管理等の活動に取り組んでいる。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

小学生を対象とした養殖体験活動は平成6年から開始した。活動の動機は、階上地区の子どもたちが地元の漁業や魚介類について学ぶ機会が年々減少している中、ここで養殖業を営んできた自分たちが次世代に地域の養殖業の正しい知識と伝統を伝えていかなければならないという思いからだった。

毎年千尋会による活動を実施し、階上地区において認知されてきた平成11年に、

気仙沼市立階上小学校から、「5年生を対象としてワカメ養殖を学ばせて欲しい」との依頼があった。階上以外の周辺地区も学区としている小学校と協力することで、養殖業にあまり触れることがなかった子どもたちにも関心を持ってもらう好機であると考え、学校行事として一連のワカメ養殖作業工程を体験させる学習支援を千尋会による体験学習活動として開始した。体験学習は児童のみならず、教員からも好評であり、毎年開催する恒例行事となった。

しかし、平成23年に発生した東日本大震災で、私たちは全ての養殖施設を失い、皆が自身の生活を再建させることで精一杯なため、体験学習をはじめとした千尋会の活動を休止せざるを得ない状況となった。ほとんど諦めかけていた状況の中、震災直後すぐに全国の多くの方々の支援をいただけたことで、ワカメ養殖を再開し、奇跡的にワカメを収穫することができた。マスコミを利用しての呼びかけや近隣の仮設住宅を訪問して収穫したワカメの無料配布を実施したところ、配布した先々で非常に喜ばれ、自分たちが行ってきた養殖業は人々に幸せを与える仕事であると改めて実感することとなった。震災を経て、養殖業を次世代に伝えていきたいという思いはより強くなり、さらに後継者を育てるための地道な活動も大事なことであると感じた。そして多くの方々の支援もあり、震災から3年後の平成26年に、体験学習活動を再開することができた。

5. 研究・実践活動状況及び成果

実施内容は学校側と協議し、双方の要望や反省点などを考慮して逐一改善しており、現在、ワカメの種付けから収穫・調理実習、PR活動、さらに成果発表会まで行う形となっている。体験学習では、子どもたちの興味や自分で行おうとする熱意を尊重し、千尋会全員が参加し指導している。以下に、平成30年度における小学生の体験内容を紹介する。

(1) 種付け (6月上旬)

①採苗器の作成、②遊走子液の作成、③遊走子(種)の観察、④採苗器への種付けの4段階を体験する。それぞれの行程で、1)採苗器に巻く種糸の間隔により種の付きやすさが違うこと、2)陰干したメカブを海水につけることで種が放出されること、3)ワカメの種が海水中を元気よく泳ぎ回ること、4)時々採苗器を動かして種を付きやすくすることなどを教え、「種付け」がワカメ養殖において最も大切な行程であることを伝えている(図2)。

(2) 種はさみ (11月中旬)

採苗器からワカメが発芽した種糸を適度に小さく切り、親縄に挟み込む作業を体験する。種糸からどのようにワカメが発芽するのかを学ぶ。挟み込む間隔により生長の速度と仕方が変わり、最終的な収穫量に影響することを伝えている(図3)。



図2 種付け体験



図3 種はさみ体験

(3) 刈り取り・ボイル塩蔵 (2月末ごろ)

①ワカメの刈り取り、②ボイル・塩蔵、③芯抜きを体験する。それぞれの行程で、1)ワカメの生長の速さと、ワカメとメカブがどのような関係なのか、2)この作業を行う理由と、温度・塩の量で完成品の質に差が出ること、3)どのような作業を経て、店頭に並ぶ形になるのか等を学ばせる(図5、6)。



図4 養殖いかだに立てた目印の旗



図5 刈り取り体験



図6 ボイル塩蔵体験

また、小学校では千尋会の養殖体験学習から発展して、以下の取組も行われている。

(4) ワカメ料理教室 (2月末ごろ)

調理実習の一環として千尋会が提供したワカメを使った親子料理教室を実施している。浜のお母さんを講師として招き、ワカメを用いた地元の伝統料理や手軽な調理方法を保護者と一緒に学ぶ。また、実食の際には同様に調理した乾燥ワカメや輸入物のワカメとの食べ比べを行い、それぞれの味や食感の違いを体感すると共に、地域で養殖されるワカメの味や品質の高さから、気仙沼の海の豊かさを実感してもらっている(図7)。



図7 ワカメ調理実習

(5) 階上ワカメのPR活動

気仙沼内外の消費者へ向けて階上産ワカメのPRを行う目的で、児童たちが道の駅を訪れた客に対して塩蔵ワカメを配布する活動を実施している。千尋会からは会員が生産した塩蔵ワカメを提供し、児童たちが配布する形に自ら計量・袋詰めを行う。配布の際に1年間の体験を通じて自身が学んだ地域の産業、及び食文化を伝えるとともに、自身が養殖に携わったものを自身の手で詰めて配布することにより、消費者の喜ぶ顔や手にとってもらう喜びを体感してもらう(図8)。



図8 ワカメPR活動

(6) 海のフォーラム (2月末ごろ)

体験学習の講師や地域住民を交えて、「総合的な学習の時間」で学んだ知識や課題についての発表会を行い、地域産業の情報や課題を共有し合う。5年生は1年を通じて体験したワカメ養殖について学んだことや、興味を持ったことについて自分たちで考え、調べたことを発表することで、体験で得た知識や理解を深めている(図9)。



図9 海のフォーラム

(7) 成果

1年を通してワカメの種付けから収穫・調理まで自分の手で体験した児童は、ワカメの生長を見守り、その成果を自身で味わうことでワカメ養殖について理解を深めることができた。また、一連の体験でワカメ養殖についてさらに興味を抱いた児童の中には、ワカメ自体を好きになり、家でワカメを食べる機会が増えたという児童も多く、休日に養殖業を営む親の作業を手伝うようになったとの声も聞こえるようになった。加えて、養殖体験学習以外の場所で千尋会員を見かけた児童から元気に挨拶をされることも多くあり、養殖体験を通じて海の豊かさに触れたことで、子どもたちの心の豊かさを育むことができたと感じている。

階上小学校の教員からは「体験学習を通じて命の大切さやそれを育む環境の重要性を学び、そのことをきっかけとして、児童が地域の自然や環境問題にも興味を持って考え行動するようになった」と述べられている。また、児童を引率する教員にとっても、赴任先地域の風土を学ぶ貴重な体験となっていると高く評価を得ている。さらに、養殖体験学習を実施している階上小学校では、当体験学習から発展させて全学年を通しての環境について考える総合学習を実施しており、その取組がユネスコ ESD 優良実践事例集に採択されている。

「ワカメ養殖体験学習」を平成11年に開始してから、一時休止を挟み、令和元年までの21年間で、延べ848人の児童にワカメ養殖について教えてきた(図10)。そしてワカメ養殖を体験した児童の中から2人が親の後を継ぎワカメ養殖業に就業するなど、少しずつではあるがワカメ養殖が次世代に受け継がれている。

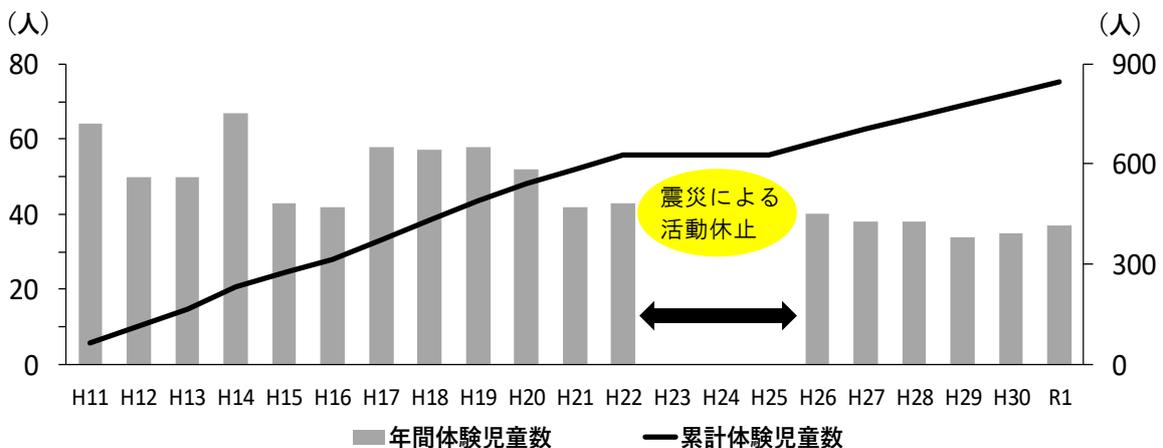


図10 体験学習の参加児童数

6. 波及効果

階上小学校ではワカメの養殖体験学習を契機として、5年生の総合的な学習の時間に「豊かな海 気仙沼 見つめよう、考えよう、気仙沼の水産業」と題して、気仙沼地域の水産業及び海洋環境を学び、研究するワークを実施し始めた。

小学校での活動成果を受けて、地元幼稚園からも園児たちに体験学習を行って欲しいとの依頼を受けるようになり、小学生向けの体験学習に園児たちが参加する形での体験学習も実施するようになった。

また、ワカメ体験学習支援活動を実施する中で、小学生が興味を持った事柄について多くの質問が挙げられたことに対し、私たちも学ぶべき知識がまだまだあるという事実を痛感させられることが多くあった。そこで気仙沼水産試験場の職員に講師を依頼し、地域の漁業者にも参加を呼びかけ、ワカメ養殖技術や衛生管理などについての講習会を実施するなど、漁業者の意識向上にも繋がっている。

7. 今後の課題や計画と問題点

震災により破損した防潮堤の復旧が、現在でも未完了のため安全面を考慮し活動内容を制限している状況にある。防潮堤が復旧した暁には活動内容を広げていきたいと考えている。

また、児童の保護者や他地域の小学校からも体験学習の要望が挙がっており、今後は活動の対象範囲を広げていきたい。

この活動を通して、気仙沼市が平成18年に決議した「気仙沼スローフード」都市宣言（図1-1）にあるように、地域の豊かな食材を育む自然環境を守り、地元の伝統的な食文化を伝えると共に、子どもたちの心豊かな人間性を育む活動を次世代に引き継いでいけるよう、今後も継続して活動を続けていきたい。

「気仙沼スローフード」都市宣言

更新日：2019年8月19日

ふるさとを愛する私たちは、美しいリアスの海と緑豊かな山や川など、恵まれた自然環境と共生しながら、地域固有の食文化と生活を大切にしてきました。

しかしながら、近年、食を育んできた自然や伝統的な文化は、便利さを優先する生活様式の変化により、失われつつあります。

地域のかげがえのない財産である風土と食文化を守り、次の世代に伝えていくこと、そして多様性を認めあう心豊かな人間性を育み、自然と調和する住みよいまちにしていくことが私たちの願いです。

この願いを実現するため、私たちは、心をひとつにして、ここにスローフード運動の精神に基づき、自然と文化を守りながら、食を活かした個性的で魅力あるまちづくりを進めることを宣言します。

- 地域の豊かな食材を育む海や山、川などの自然環境を守り、次の世代に引き継いでいきます。
- 地域の風土が育んだ、伝統的な食材や料理技法、質の良い食べものと飲みものを守り、工夫し、提供していきます。
- 安全で安心な質の良い食材を生産する人々を守り、育てていきます。
- 子供たちを含め、人々に、食の楽しさや味覚の大切さ、真の心の豊かさを伝えていきます。
- 地域や国、信条の違いを超えて、それぞれのもつ食の多様性を認めあい、交流を通して相互の理解を深めながら、世界の平和に寄与していきます。

平成18年9月27日 議決

気仙沼市

(気仙沼市ホームページより)

図 1 1 「気仙沼スローフード」都市宣言